連載

株式評論家 山本伸一の

兜町スタンダード

10月相場の傾向と注意点

「15年ぶりの円高局面」に対する「日銀の追加金融緩和」「6年半ぶりの為替介入」など、波乱含みのなか金融政策発動を機に株価水準を切り上げてきた「9月相場」も終わりを迎え、いよいよ「10月相場」が到来する。

10月相場といえば、「株価暴落」が発生するイメージが強いのではないだろうか。1987年の「ブラックマンデー」が有名だが、2008年に発生した「アメリカ発世界金融危機」も記憶に新しい。

データとしては、1049年以降、日経平均株価における10月の月末終値が前月末比で上回った回数は32回。勝率となると52・5%とほぼ五分の内容だ。「暴落イメージ」に反してやや意外感が伴うが、基本的には調整色を深めやすい9月からの見直し買いが入る傾向がある。

今年は季節性に反して「9月に上昇」。同様のケースには2007年が挙げられるが、同年は前半は先月の勢いを引き継ぎ上昇したものの、中旬からは下落を余儀なくされた。この基調変化の要因は「決算開示」が作用したと見る。

第2週のSQ算出から週明けの祝日休場にかけては、日程面で狙いを絞り難いうえ、後半にかけては9月中間期の業績開示とともに選別色を強めていく。とくに開示が先行する米国企業の決算反応に沿った神経質な展開となるだろう。まずは企業業績に関心を持って臨みたいところだ。